



中国のテレワーク事情

ほく
北

らい
菫

●早稲田大学トランスナショナルHRM研究所 招聘研究員

今年初めに始まったコロナ禍は、世界中を混乱に陥れ今でも収束したとは言い難いが、人々の生活や仕事に様々な変化が起きている。テレワークの急速な普及はその一つである。

日本では、通勤ラッシュの緩和や社員の家庭事情への配慮のため一部の企業ではコロナ禍前からテレワークを推進しようとする動きがあった。一方、これまで中国ではテレワークに対する認識と理解は必ずしも浸透していなかった。しかし、中国でもコロナ感染拡大を防止のため、2020年2月の旧正月の休暇の頃から、急遽、本格的なテレワーク勤務の導入が進んでいる。本稿は中国で実施されているテレワークに関する実情を取り上げてみたい。

「996」から「007」に

中国のホワイトカラーの労働環境を表す言葉に「996」がある。これは、朝9時から夜の9時まで、週に6日間働くという意味である。元々は中国のIT産業における長時間労働を表す言葉として2016年頃世に出た言葉であった。

しかし、2019年にアリババグループの元CEO ジャック・マーは「996はむしろありがたいことだ。他人より倍以上働き、倍以上の苦勞をせずにどうして人生の勝者になれるのか。むしろ

「996」のような労働環境に感謝するべきだ。」と発言し、大きな波紋を呼んだ。

これをきっかけに、「996」は賛否両論が渦巻き流行語にもなった。同時に、中国には沢山のブラック企業が存在する事実も暴露された。しかし、「996」が巻き起こした論争の決着がつかないうちに、コロナ禍が深刻化した中国でもテレワークが本格的に導入された。それによって、長時間労働の問題がさらに浮上してきて、最近では「996」に代わり「007」が勤務時間の代名詞になっている。つまり、午前0時から次の日の午前0時まで、週7日間働くという意味である。

多くの人が、テレワークをすれば通勤ラッシュから解放され勤務時間にも融通が利くと考えられていたが現実とは違った。中国の人気SNSウィーチャットのテレワークに関する記事では、当初の期待に反する絶望的な声が圧倒的に多かった。理由は様々だが、最も多かったのは勤務時間の曖昧さである。多くの人が、勤務時間が終わっても日報作成やメール対応に追われ、勤務時間外でも上司や同僚からの電話に出なければならないと嘆いている。このように、テレワークの導入で元々長時間労働が存在する中国の労働環境が更に悪化し、「996」どころか「007」に変わったと揶揄されている。

仕事をしている時間と「工作中、
ドアをノックしないでください、
ご協力ありがとうございます」と
いうメッセージ



テレワーカーの親に対する注意書き
(出典：www.redants.sg)

子供より親からの邪魔が深刻

日本では、子育て家庭がテレワークをする時に子供がいて仕事が捗らないという悩みが取り上げられる。中国でも日本と状況は同じだが、同居する親が仕事の妨げになるという悩みの方が深刻なようである。

中国の親子関係は日本や他の先進国と少し異なり、子供は結婚して独立しても親と密接な関わりを持っている。筆者が以前寄稿した中国での子育て事情で紹介したように、育児への親からのサポートは当たり前であり、出産後の女性の社会復帰への大きな支えである。しかし、テレワーク実施においてはこのような親子関係が妨げになるのは中国特有な点であるかもしれない。

筆者の友人は、大手国有企業の管理者であり、バリバリのキャリアウーマンである。彼女のキャリアの成功には親たちの育児への協力が欠かせないものであった。同じ団地に住む彼女の両親は普段から小学校5年生の孫の学校と塾の送り迎え、一日三食の支度等を全部引き受けている。筆者は、彼女から自分の親がいかにサポートしてくれるかという自慢話をよく聞かされていたが、彼女がテレワークを始めると親の存在が仕事の妨げになることに気づいたという。例えば、長い間パソコンを見ると目に良くない、ちゃんと水分を取りなさい、

等と細々したことで口を挟んでくる。更に深刻なことに、普段、両親が健康のために行っている公園でのダンスがコロナ禍でできないため、家の中でダンスをするだけでなく、子供夫婦や孫にも体を動かさないのは体に悪いからと一緒にやらせようとするのだという。両親の行動は子供を心配するがゆえのため無下にもできず、早く職場で仕事を再開できるように毎日願っていたという。

このように、中国では親の「愛情」でテレワークを敬遠する事例は決して珍しいことではない。中国のSNS上では、親たちの「愛情行為」がテレワークの妨害になるという苦情があふれている。中にはこうした親に対し、注意書きをドアにはる人もいた。中国の親たちの行動は日本人が見れば過保護に見えるかもしれないし、日本では稀かもしれないが中国では決して珍しいことではない。

紙幅の制限があるため、今回は中国でのテレワークの実情についてのマイナス面の事例を取り上げるに留める。機会があれば、次回は中国でのテレワーク実施のプラス面も紹介したい。

冒頭でも述べたように、コロナ禍を背景に推進されたテレワークは世界中の人々の働き方に大きな影響をもたらした。このほかにも、中国での労働現場でどのような動きが生まれてくるのか、筆者は見つめていくつもりである。